

---

# 真十恋姫無双～仁愛の忍び伝～

デカラビア

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

真十恋姫無双〜仁愛の忍び伝〜

### 【Nコード】

N2409T

### 【作者名】

デカラビア

### 【あらすじ】

昔から代々続く忍びの家系で育った主人公裏迅惣介ある日任務から帰り親父から貰った銅鏡を割ってしまう。そして、気づけば見知らぬ広野にいた。そこから、惣介の大切な人を守る為の戦いが始まった。



## 主人公設定（前書き）

少し詳しい主人公設定です

## 主人公設定

名前：裏迅惣介

年齢：18歳

性別：男

身長：176cm

武器：迅刀・裏月<sup>りげつ</sup>+苦無

裏月：刀身が全て漆黒に染まった小太刀より少し長いくらいの太刀で軽くよく切れる  
しかし、その特性は強度その強靱なまでの強度で相手の攻撃をさばくことができる

性格：基本的には誰にでも優しい性格で動物や老若男女問わず  
懐かれやすい性格をしているが賊などには容赦がない

容姿：基本顔は、黒い布で隠しているがその容姿はとても整っていて  
眉目秀丽というのが似合う容姿、髪は短い漆黒で目は紅眼

代々裏迅忍法という忍術を扱う裏迅家の後継者として  
幼い頃から厳しい鍛練をしてきた

今では、裏迅十忍法と呼ばれる裏迅忍法最高峰の術を全て極めた最  
強の忍び

幼い頃から鍛練してきたせいか頭の方は微妙

裏迅十忍法：裏迅家に伝わる殺人技法で本来は数十年の修行で一つ  
だけしか身につけることが出来ない習得難易度の高い技十種のこと



## 主人公設定（後書き）

どうでしょう？

忍法などは追々説明します

## プロローグ（前書き）

恋姫の世界に行く前の主人公の話し

## プロローグ

夜ある屋敷の一室

そこには、2つの影が存在していた

1つは、初老の男のもう1つは、黒い装束を纏った少年の影

「た、頼む！ 命だけは助けてくれ！」

と、初老の男が口にする

「その願いは聞けないな…忍法・躯狩り」

「ぐぎぎ ああああ！…！」

男の願いも虚しく、男の頭、両手足は同時にに切り離され絶命した

「ふゝ任務完了」

シユン！

その言葉を言い残し、少年は切り離れた男の首を持ちその場から姿を消した

所変わり、ここは人里より少し離れた場所にある  
忍びの一族裏迅家の本家そこに、あの少年の姿があった

俺の家は代々の忍びの家系護衛から暗殺まで  
幅広い仕事をこなしている  
今回の俺の仕事は、横領やら脅迫やら好き勝手し放題だった  
爺の始末この仕事を片付け今日の前にいる  
俺の父に首を放り投げる

「親父、これでいいのか？」

「おゝ早かったな惣介」

「たかが、爺1人の始末だしな楽勝だ」

「ははは　そうかほれこれが報酬だ」

「そう言い、投げ渡してきたのは…」

「何だこれ？銅鏡？」

「ああ、何かけっこうな価値があるんだってよ」

「こんなのがか？」

俺はそう言って、手にした銅鏡を見る

「明日親父のところに行って行けばいいだろ？」

「爺さんのところにか…そうするか」

親父の親父つまり俺の爺さんは、骨董を集めるのが趣味らしく、けっこう高く買ってくれたりする

「じゃ、明日行ってみるか」

いくらで売れるかな〜と思いつつ親父の部屋を後にした

自室に戻った俺は、自分なりに銅鏡の目利きをした

「ん〜爺さん最近けち臭いからな〜…この銅鏡  
いつの時代のだろう?」

色んな角度から銅鏡を見てそつ口にする  
その時…

ピキ!パリーン!

「うわ! やべえ」

少し力を加えすぎ銅鏡を割ってしまった

「はあゝもう売れないな…ん？」

俺は、割れた銅鏡に異変を感じた  
割れた銅鏡から少しずつ光が出始めた

「何だよ！？この光…わああああ！！！」

光が部屋を覆い光が治まった部屋には、惣介の姿は消えていた

## プロローグ（後書き）

次回惣介が恋姫の世界へ一体どうなる！？

では、お楽しみにしてください

**第一話：目覚めた場所は（前書き）**

恋姫の世界に来た惣介

ちなみに惣介は、忍びなので最初から殺人に対しては抵抗はあまりない

では、第一話：目覚めた場所は…をどうぞ！

## 第一話：目覚めた場所は

「おー！ 広い空広い荒野……何処だこー！」

俺は、今荒野のど真ん中にいる

「（これからどうしようか……先ず人が住んでそうな所に行ってみようかな）」

と、考えが纏まり歩き出そうとしたとき

「おい！」

「ん？」

見知らぬおっさん達に話しかけられた

「兄ちゃんいい着物着てんじゃねえか  
そいつを全部寄越しな」

「は？馬鹿かあんた等そんなので本当に  
寄越すとも思ってたんのか」

「んだと！人が下手に出てりゃ付け上がりやがって！！」

「お前等がいつ下手に出た」

ん？とかこいつ等は何で揃って黄色い  
鉢巻なんかしてんだ？

は！ペアルックか！？　うえ気持ち悪い

「もう許さねえ！　ぶっ殺してやる！！」

そう言うなりおっさんは、腰に差していた  
剣を俺の方に向けた

「ひやはは！ 今さら謝っても遅せえぞ」

剣を俺に向けて、高笑いするおっさん  
俺は、それに対して…

「……………」

「何だ？怖くて喋れなくなったのか？」

「ぎやははは！ 俺達の恐ろしさが分かったみたいだな」

「ああ、先殺した馬鹿な家族と一緒にだな」

こいつ等は…今なんて言った？

「殺した家族？」

「ああ、そうだよあれは楽しかったぜ  
助けてくれ〜て泣いてよ」

「ひやはは！ そうだったよなありや最高  
だったぜ！」

腐ってやがる…決まりだな  
こいつ等はここで…殺す！！

俺は、天に手を翳す…そして

「忍法・駆狩り」

視認出来ない刃が襲う

「ぎゃああああ!!う、腕があああ!!  
俺の腕があああ!!」

「お、おい! 大丈夫か!? てめえ  
ぶっ殺してやる!!」

仲間の仇ともう1人の男が剣を振り上げ  
襲い掛かってきた

「死ねええ!!」

パシ

俺は難無くその刃を掴み取り

バキン！

…砕いた

「な、な…」

「さて、先ほ手加減して殺ったけど  
今度は…忍法：軀狩り」

「ぎゃああああ！！！！」

男の体は物言わぬ肉片と化した  
それを見た最後の1人は顔を真っ青にさせていた

「ば、ば、化け物…」

「そうだな、俺は……化け物だよ」

ザシュ！

男が最期に見たのは、冷徹な自分を見下した  
少年の冷たい笑いだった

第一話：目覚めた場所は（後書き）

ちよつと短すぎたかな？

では、忍法紹介です

（忍法：軀狩り）

軀を狩る軀とは、人体の頭部と手足のことを指している、その部分を視認出来ないスピードで、狩り取る忍法裏迅十忍法の一つ

## 第二話・王佐の才との出会い（前書き）

今回第一恋姫キャラと出会います

まあ、タイトルで誰かは分かるとは思いますがどうぞ！

## 第二話：王佐の才との出会い

あの後俺は近くの町まで行こう  
と思い歩いていったのだが

「ここは…何処だろう？」

絶賛迷子中です！

実は俺って、けっこう方向音痴だったりして…はあ

「じりり」

「きゃあああああ！！」

「何だ！？」

俺が途方に暮れているとき  
突如女の子の叫び声が聞こえてきた

「行くしかないよなこういうのって」

俺は急いで声のした方へと走った

【said ????】

迂闊だったわ

まさか…このわたしが

あの馬鹿(袁?)に愛想尽かし今は陳留を治めている  
曹操様のところに行こうと護衛(男)を雇って向かってみれば

突然賊共に襲われ、雇った護衛達はそそくさと逃げてしまった  
まったく！ これだから男は！

「へへへ、もう逃げられないぜ」

賊は十人そのどれもがわたしの体を  
嘗め回すように見る…気持ちが悪い

「こ、来ないで！ 汚らわしい手でわたしに触らないで…！」

わたしはそう叫び抵抗する  
しかし、わたしの抵抗など賊達にしてみればなんの意味もない  
すぐに追い込まれてしまう

「なあ、そろそろ犯っちまおうぜ」

「へへへ、そうだな」

こんなところでこんなやつ等にそんなの嫌！ 誰でもいいから…

「助けてえええ！！」

「叫んでも誰も」…」「ドサ

「来たりするんだなこれが」

わたしの近くにいた賊の首がとび  
いつの間にか漆黒の剣のような物を持ったおかしな黒い装束に包ま  
れた

男（声からして）がわたしの前に守るように立っていた

「な、何だ！？ てめえは！」

「お前等こそ寄って集ってこんな可愛い娘襲うなんて…覚悟はできてんのか？」

黒い男がそう言つと男達の顔がどんどん真つ青になり、喉を掻き毟って自害したそんな光景と黒い男の姿を最後にわたしの意識は堕ちた

【s a i d 惣介】

悲鳴が聞こえた場所に行くとな猫耳のフードを被った女の子を複数の男達が襲っていたそのうちの1人が女の子に手を伸ばした時

「助けてえええ!!」

女の子のその声で、俺は体に隠し持っている  
愛刀裏月を取り出し男達に向けて駆けた

「叫んでも誰も」...

「来たりするんだなこれが」

まずは、一番近くにいた男の首をはね  
女の子に危険がないように前に立った

「な、何だ！？ てめえは！」

残った男達の1人が言う

俺は、その問いに考えるまでもなくこう言い放った

「お前等こそ寄って集ってこんな可愛い娘襲うなんて…覚悟はできてんのか？」

忍法：響忌

辺りを人の聴覚では聞き取れないほど小さな音が響く

その後男達は自らの喉を掻き割り自らの手で命を絶った

「大丈夫か？　って気絶してる」

このままにはしておけないしな  
目が覚めるまで待ってるか

【s a i d 猫耳】

「ん…うんは…」

わたしは確か賊共に襲われて…犯されそうになって…は！  
変な黒い男に助けられて…わたし助かったの？

「誰もいない…」

周りを見ると日は沈み  
焚き火の火が周りを照らしていた

「あれ？ これって」

わたしは自分にかけている黒い服に気が付いた

「あの…男の？…温かい」

って!?!?!わたしは何をしてるの?!?!?  
男の服なんか…なんかノノノ

「お！ やっと起きたのか」

声がして振り返るとあの黒い男がいた

「っ！？／／／／」

わたしを助けた男の顔それは、今まで  
会ってきた男達と比べるには失礼なくらい  
整っていた

このわたしが見惚れるほどに

【s a i d 惣介】

あの猫耳少女が気絶して数時間  
一向に目が覚めないの俺は装束を少女にかけて食糧の調達をしに  
行った

「こういう時親父のサバイバル式修行  
が役に立ったな」

親父に修行という名目で一ヶ月何処かも分からない  
森に放り込まれた時のことを思い出すな  
あれ？ 目から塩水が

「けっこう獲れたな」

猪一頭に川があったからその水と魚を  
四匹これぐらいで足りるだろう

「お！ 起きてたのか」

調達から帰ってくると猫耳少女は起きていて  
何かぶつぶつと呟いていた

「とりあえず自己紹介な俺は、裏迅惣介。お前は？」

「わたしは苟イク、真名は桂花よ」

「真名？ 何だそれ？」

「真名を知らないの!？」

「そんなに驚きか？」

「当たり前よ真名を知らない人なんて普通はいないわ」

「へ」

すぐ桂花は真名について教えてくれた  
勝手に呼ぶと首はねられるって物騒すぎだろ

「でもいいのか俺なんかに教えて」

「惣介は、一応恩人だから教えただけよ／＼／」

「応って…」

「そついや桂花は何処に行くんだ？」

「陳留よそこで太守をしている」

「曹操様のところに軍師として仕官しようと思って」

「それって…俺も行っていいのか？」

「え！？ 惣介も一緒に？／＼／」

「ああ、駄目か？」

「さすがに迷惑かな？」

「べ、別に／＼駄目ってわけじゃ……」

少し顔を紅くさせ桂花は言った

「じゃ、決まりだな」

「か、勝手にすれば！／＼／」

これがツンデレってやつなんだな  
と思いつつ俺は眠りについた

第二話：王佐の才との出会い（後書き）

はい！初恋姫キャラは桂花でした

あのツンが可愛いんですよね

なお、うちの桂花は百合ではありませんので  
あしからず

（忍法：響忌）

人の脳になんでもいいので音を響かせ  
脳を麻痺させ体の機能を破壊出来る  
相手を選ぶことも出来る

### 第三話・仕官時々模擬戦（前書き）

今回桂花が曹操に仕官そして、主人公は…？

では、お楽しみください

### 第三話・仕官時々模擬戦

「さあ！ どこからでもかかってくるがいい！！」

と言ってくる猪武将こと夏侯惇  
どうしてこうなったんだろっか

そう…あれは数時間前

朝になると同時にあの森から桂花と一緒に  
出て桂花の案内の下昼くらいに陳留に着いた

「おお！　ここが陳留かいいところだな」

「だからこそわたしはここに仕官しに来たんじゃない」

「それもそうかところどころでござって仕官するんだ？」

「募集があればいいんだけどなければ…」

なければ…何！？　ものすごい嫌な予感がするんだけど  
桂花が何をするかは分からないけど何故か切実にあってほしいと俺  
の勘が言っている

「お！　あつたぞちよつと文官のやつ（ふう〜これで安心だ）」

「そっねそれもちよっぴ今日やるみたいだし」

「行ってくるんだろ」

「ええ」

「頑張れよ俺はまだここにいてるつもりだし」

他に行くところないしな…迷っし

「合格したら、何か奢ってやるよ」

「ふふ、その言葉忘れないわよ」

「  
ああ  
」

最後…というわけではないが、そういう言葉を交わした  
後、桂花は城へ俺は、宿をとりに行った…それがつい数時間前の話だ

結果から言えば、桂花は見事合格した  
その後暫くして俺のところに来て俺に曹操のところに来てと言っ  
てきた

「何故に？」

「華琳様に惣介のこと話したら連れて来なさいって言われて」

「それって曹操のことか？」

「ええ、ちゃんと来るのよ」

どうやら俺に拒否権はないようだ拒否するつもりもなかったが

「分かった行くよ」

「顔は隠しなさいよ」

「は？ 何でだ？」

俺ってそんなに酷い顔してる？

「べ、別に他意はないわよ／＼／＼」

「まあいいか」

そして、俺は桂花に連れられて曹操の城に行った（フル忍び装束で）

桂花に案内され王座に通された俺を  
待っていたのは小柄な金髪美少女と黒髪でどこかアホっぽそうな美  
少女さらに水色の髪の  
クールビューティーな美少女だった

「貴方が惣介かしら？」

3人の美少女の内金髪の方が話しかけてきた  
多分この娘が曹操だろうな

「ああ、そうだけど」

俺がそう言つと…

「貴様あ！ 華琳様に向かつてその口の利き方なんだ！」

なんか怒られた

「春蘭静かにしなさい悪かつたわね###NAME1##」

「いやいいんだよ俺も少し馴れ馴れしかったから」

しかし曹操に怒られた後シユンとなっているあの黒髪の娘…可愛いな  
と思った時水色の髪の娘と目が合い何故か頷かれた

「そつえば何で俺を呼んだんだ？」

「桂花の話聞いて会ってみたくなったのよ」

「そうか…ならもういいか？」

「まだよ貴方にはこの春蘭と戦ってもらおう」

「それはどつちだ？」

「私だ！」

そう言って出てきたのはあの黒髪の娘方だった

「この娘と戦えばいいのか？」

「ええ」

「ちなみに拒否権は？」

「あると思っっ」

「ですよねっ」

俺に拒否権はない…：そうないんだよ  
その後俺は、鍛練場に連れて行かれたそして、長い回想のなか冒頭に  
至る

回想も終わったことで現状確認  
現在対峙している夏侯惇（連れて来られた時に教えてもらった）は  
大剣を構えている

「2人とも準備はいいわね」

と曹操が言う  
仕方ない久しぶりに純粋な剣技で挑んでみようかなと思いき裏月を取  
り出し構える

「では…始め！」

合図と同時に先に仕掛けてきたのは夏侯惇だった  
勢いよく振るわれる剣は俺に触れることなくその勢いそのまま地面へ…

ドゴーン…！

「……」

地面に小さいながらもクレーターができる

いやいや！ どんだけ力あるんだよ  
当たったらさすがに死ぬぞ！！

「どっつした！ 避けてばかりでは勝てないぞ！」

「当たったら死ぬだろうが！」

「ならば死ね！！」

この人怖いんだけど…

と、そんなことを攻撃を避けながら考えているわけだが…そろそろ  
終わらせるか主に俺の為に

俺は飛び退き夏候惇との距離を広げる  
そして裏月を鞘にしまい居合いの型をとる

「何だ諦めたか」

「いや違つよ夏侯惇…目離すなよ」

シュン！

「裏迅剣術一ノ型：瞬影」

「なっ！？」

ガギン！

それは一瞬…夏侯惇の目の前まで一瞬で移動し、剣を振り抜いたそれを何とか大剣で防いだ夏侯惇だが勢いを止められずそのまま吹き飛んだ

吹き飛ばされた夏侯惇は壁にぶつかり  
気絶はしていなかったがだいたいダメージがあるように見えた  
俺はその夏侯惇に近づき裏月を突きつける

「俺の勝ち…でいいよな？」

「く！ 私はまだやれる！！」

「そこまでする春蘭」

また襲い掛かってきそうな勢いの夏侯惇を曹操が宿める  
ホント曹操には素直だな

「惣介貴方春蘭を倒すなんて予想以上だわ」

「そりゃあよかつたじゃ！ 俺はこれで…」

と、帰ろうとしたところ

「待ちなさい惣介。貴方私のもになりなさい」

「仕えろってことか？」

「ええ、その通りよ」

どうしようか行くあてもないし路銀もなくなってきたからな  
ちよどいいか先から黙ってた桂花もなにか期待の眼差しでこっち  
見てるし

「分かったこれから曹操殿に仕えよう」

「ふふ、私の真名は華琳よこれからはそう  
呼びなさい」

「か、華琳様！　こんな奴に真名をお許しになるのですか!？」

夏侯惇がもう反論：嫌われてんな俺

「春蘭貴女も教えなさい秋蘭貴女もよ」

「夏候淵だ真名は秋蘭だよろしくな惣介」

「ああ、よろしく」

この水色の髪のは娘は秋蘭と言うのか  
夏候惇の姉妹かな…あんま似てないけど

「分かったわね春蘭」

「うう…はい」

なんかあつちでは説得完了みたいな感じになってるな  
トボトボとこちらに歩いてくる夏候惇  
そのシヨボンとした姿はかなり可愛い

ギロリ

怖！ 何か桂花睨まれた  
なにあれ！ 凄く怖いんですけどその殺気で人殺せるぞていうかな  
んで怒ってるんだよ

「真名は春蘭だだが！ 私はお前を認めんぞ！」

「それでいいよ俺は、惣介だよろしくな」

ナデナデ

つい手が夏候、じゃなくて春蘭の頭を撫でていた  
いや可愛いってつい…ね

「な、何をする止める！／＼／」

と言うが春蘭は抵抗はしていなかった

そして、それを暫く続け一旦帰った

撫でた手を離れたとき春蘭が残念そうな顔したが気のせいだろう

余談だがこの後二時間ほど桂花に理不尽な説教を受けた…死にそうだった（精神的に）

### 第三話：仕官時々模擬戦（後書き）

やっと魏に入りました

個人的に魏の方が好きなキャラが多かったので魏 にしたわけですが  
蜀や呉にも少し手を出すかも

あと主人公は顔を隠してましたよちゃんと

何故それを指摘されなかった

というのはある理由が（桂花の戦略的な意味で）

誰か感想をください！？

では、次回をお楽しみください

〈裏迅剣術〉

裏迅には忍法以外にも剣術・柔術・歩法  
などがあります

裏迅十忍法はこの剣術・柔術・歩法の応用のようなものです

く一ノ型：瞬影く

裏迅の歩法：月蟬で間合いを一気に詰め  
渾身の居合いを叩き込む剣術

く歩法：月蟬く

瞬間的に数回く数十回地面を蹴り相手との間合いを詰める或いは移動に使う歩法で地面を  
蹴る回数が多いほど速くなる（ぶっちゃけワンピースの剃）

惣介「そういえば、桂花？」

桂花「なによ」

惣介「あの時もし、文官を募集してなかったらどうしてたんだ？」

桂花「そんなの決まってるわ…このわたしの力を示す為に“色々”とやってたわ」

惣介「募集されてて…ホントよかった」

番外編：桂花の策略（前書き）

今回のお話は何故惣介がフル装備で顔を隠していても何も言われなかったのかが分かります

## 番外編：桂花の策略

俺は、桂花の説教を終えてからある疑問に今更気づいた  
それは…

「そついえば桂花？」

「なによまだ怒られ足りないの？」

「違いえよ何で曹操達は、俺が顔隠していても何も言わなかったんだ？」

普通なら理由とか聞かれるよならなんで？  
と桂花に聞きながらも自分の頭でも考えていた

「し、知らないわよ!? それくらい自分で考えなさい! じゃわたしはもう行くから!」

「あ、おい! 行っちゃったよ」

何で俺は怒鳴られたんだろうか?

俺って嫌われてるのかな? はあゝ

【s a i d 桂花】

危なかったわね当然疑問に思うことでしょうけどなんとかあったかしら  
言えるわけないじゃない惣介の顔を隠しているのを華琳様達が疑問  
に思わなかった理由それは…

曹操様の文官になって暫くしたある日のことだ  
いつものように曹操様の軍師になる為に仕事をしていたときのこと

わたしは何故か王座つまり曹操様に呼ばれた  
そして、今日の前にいるこの方が曹操様隣には、夏侯惇、夏侯淵い  
ずれも曹操様の信頼厚い将だわたしも…いつか

「よく来たわねまずは貴女の名を教えてください？」

「はい！ わたしの名は筍イク、真名を桂花と申します」

これが曹操様遠目くらいでしか見たことはないけどあの馬鹿（袁？）  
とは比べ物にならないわね

この覇気…やはりわたしが仕えるのは曹操様だけなのだこの時確

信じた

「あら真名までいいのかしら？」

「はい曹操様への信頼の証として」

「そう…ならば私の真名も授けましょう真名は華琳よ」

「華琳様！？」このような者に真名を授けるなど！？」

「よいのですか！？」

夏侯惇が何か言っていたがわたしはそれ以前に真名を授けられたことに驚いていた

思わず声を張り上げ叫んでしまった

「信頼の証なんですよならば私もその信頼の証として我、真名を授けましょう」

信頼の…証

その言葉にわたしはこの方の所に来てよかったとそう思った

「はい！ 信頼の証しかと受け取りました華琳様！」

そう言つと華琳様は綺麗に微笑んだ

美しい…素直にそう思う

しかしこの後の華琳様の私に対する用事があんなこととは…

華琳様に真名を授けてもらった後華琳様が真名を授けたならということ夏候淵にも真名を教えられた渋々だが夏候惇にも教えられた

それからも話は続いたその時わたしは、惣介のことを少し話したわ  
たしが呼ばれた理由が分かってきた  
それは…

「桂花貴女の試験の結果はとても素晴らしかったわそこでだけど貴  
女を次の遠征の成果を見て

合格点ならば私の専属の軍師になってもらいたいのだろうか?」

願ってもないことだった

わたしはすぐにはいと返事をし、少し舞い上がっていた  
ふふ、このことを惣介に話したら何て言うかしら? ほ、褒めてく  
れるかしら／／／／

は!?! わたしは何で惣介に褒められたいだなんて思ってるのよ!?!  
ま、まあ他の男達よりは遥かにマシではある…けど／／／／／

「桂花聞いているのかしら?」

「は、はい！　なんででしょうか？」

「貴女の話の中に気になることがあったのよ」

「気になることですか？」

「その惣介という男の武についてよ」

武について…華琳様に話していない部分だ  
話しても信じてもらえないかもしれないから話さなかったがどうして気になったのだろうか？  
わたしはそれを尋ねたそして華琳様はこう答えた

「貴女はどう見ても武なんて出来ないでしょう？　そんなとき賊に襲われれば誰かに守ってもらわなければいけないそして唯一守れそうな存在それが惣介という男…そう思ったのよ」

今気づいたが確かにこんなことにも気づかず話していたなんて…

「それでどうなのかしら？」

わたしは話した惣介の武についてわたしが知る限りのことを…

「おもしろいわねその男を連れて来てくれないかしら」

「惣介を此処にですか？」

「ええそうよこの眼で確かめたくてね」

確かめる…ッ！？ この時わたしの頭に何かが過ぎった

華琳様が惣介に会う

華琳様が（春蘭、秋蘭も）惣介の顔を見る

子供誕生!?

やばいわ!？ 色々飛ばしすぎな気もするけど、とにかく惣介の顔を見せないようにしないと  
って…わたしは何でこんなに必死になってるのよ!？  
別に惣介が誰というがわたしには…

そ、そうだわ！ これはそう！ 華琳様のためなのよ！  
華琳様が惣介の毒牙が掛からないようにするために！！  
わたしは策を考えるそして…

「華琳様その前にお願ひがあるんですが？」

「なにかしら？」

言うんだわたし！ 華琳様のためわたしのたまじゃない／／／／  
コホン！ 華琳様のために！

「惣介は、昔顔に酷い火傷を負い顔を隠しての謁見そしてそれについて指摘をしないで欲しいのです」

「それくらいならいいわそれでお願いとほそれだけかしら？」

「はい！　ありがとうございますですではわたしは惣介を連れてまいります」

というのが真相だ  
だが上手くいったのだろうか模擬戦後の春蘭の頭を撫でていたあの時の春蘭の表情は…

あー！　またイライラしてきた！

何でわたしはあいつとのことでこんなになってしまつたのよ！

惣介に会ってからわたしは変になってしまったのかしら  
ホント…これもなにもかも惣介のせいなのよ！

よし！ もう一度説教でもしてきましょう

「と言っ訳で覚悟しなさい惣介！」

「何だそれ！？ ちょっと理不尽だぞ！？」

「うるさいわね！ 大人しく説教されてなさい！」

惣介… あんたのこと考えるときは何故か胸の辺りが温かくなるのよ  
理由は分からないでも… 心地はいい…  
だから…

暫くはあんたのこと考えていてやるわよ／＼  
この感情がなんなのか分かるまで…



**番外編：桂花の策略（後書き）**

と、まあこんな感じです

キャラ表現が難しいので違つかもしれませんがそこはすみません

誰か感想をください！ アドバイスなど問題点も可！

では、次回をお楽しみに

#### 第四話：小さな豪傑（前書き）

恋姫の世界の女の子は部分的に凄くチートですよ

今回はあの子の登場です

タイトルで分かると思うけど、どっぞぞ！

#### 第四話：小さな豪傑

俺が華琳のところの正式な将となって一週間位が過ぎた

それまでの出来事は大体同じ春蘭に勝負を挑まれる 俺が勝つ 春蘭何故か泣く とりあえず頭撫でる 顔を真っ赤にして怒る 突然出てくる桂花に説教される

それが何気に習慣のような形になってきた今日この頃今日も今日とて…

「惣介！ 私と勝負しろ！！」

物凄い勢いで扉を破壊し入ってくる猪じこと春蘭  
これで俺の部屋の扉は8枚が犠牲に…

「春蘭いい加減静に入ってこれないのか？ あれかやっぱりお前は猪なのか？」

さすがに少しカチンときた俺はついつい本音が出てしまう

「私は猪ではない！ 今度こそ貴様に勝ってやるんだ〜！！」

と駄々をこねる春蘭……ちょっと可愛いと思ったのは内緒だ

「まあまあ姉者それくらいにしないか」

「う〜秋蘭〜」

そしていつの間にかいた秋蘭に宥められる春蘭  
因みに秋蘭とは一番仲がいいけっこう気があったりするんだよな

「そういえば秋蘭は何か俺に用事があるのか？」

「ん？ そうだったな華琳様が惣介を呼んでいてな」

「華琳が？」

俺は、何だろうと思いながら華琳の所へ秋蘭達と向かった

「待っていたわよ惣介」

王座に座りながらそう言う華琳はどこかご機嫌だった

これは確実に何かあるな

「華琳。俺に用って何だ？」

「これから近くに現れた賊を退治しに行くわよ」

「賊か…でも用はそれだけじゃないだろ」

この一週間で華琳を見てきて深いところまでは分からないが彼女の霸王の部分はだいたい分かるようになった  
俺がそう言つと華琳は悪戯っぽく微笑み言った

「桂花のところに行って帳簿を取って来てくれるかしら、それと桂花も連れて来てちょうだい」



最近寝ても覚めてもあいつの……惣介のことが頭から離れない  
試験のことで不安だったでもわたしはあいつを見るだけでその不安  
が一気に吹っ飛んでいって胸が温かい気持ちになった

わたしは、男が嫌い……大嫌いでも……あいつのことは惣介は、はつき  
り言っただ嫌いじゃない

むしろ……

「桂花は〜と…お！ いたいた」

華琳に言われ帳簿を取りに桂花のところに行った俺は桂花を探していた

そして馬具を確認している猫耳を見つけた

ただ何でちょっと頬を赤くさせているんだろっか？  
まあいいかと思いい桂花に近づき声をかけた

「お〜い桂花…桂花！」

「にゃっ！？／／／惣介！ どうして此処に！？」

にゃっ……っ……可愛いな本当に猫みたいだ

「華琳に頼まれてな帳簿を取りにきた桂花の迎えにもな」

「そ、そう。はい……これがそうよ」

「ありがとう桂花」

「べ、別にあなたの為じゃないわよこれは華琳様のために！／／／／／」

「ははは　　そうだな桂花は華琳様が大好きだからなさ！　行こう  
ぜ」

「そ、そうね……はあ」

何故かため息を吐いた桂花を連れ、俺は華琳のところへ戻った

「これはどういふことかしら桂花？」

俺が桂花を連れて華琳のところに行き帳簿を見せた瞬間華琳の雰囲気  
気が変わった

あの帳簿に何か書いてあったのかな？

「これ…とは？」

「ふざけないでこれに書いてある糧食の量は当初の半分しかないじゃない理由を聞かしてもらおうよ」

それで怒っていたのか華琳は…でも桂花は何を言っただ？  
俺はそう思いながら桂花を見たそして桂花が口を開く

「その量で十分だと確信があるからです」

「そう…なら今回の戦で糧食が足りなくなったその時は…分かって  
いるわね」

「はい」

そう返事した桂花の目は確かに覚悟があった

無事出発することになり、俺にとってもそして桂花にとって初めての戦だ

俺は元の世界で暗殺とかをやっていたから人を殺すことには耐性ができている

しかし桂花は…直接的ではないにしろ人を殺すことになる…大丈夫かな？

「桂花大丈夫なのか？」

「ええ、本当に想定外なことがない限り大丈夫よ」

そう言う桂花の顔には確信という自信見てとれた…でも

「（そういうことじゃないんだけどな）そっか俺も出来る限りやるつもりだから頑張ろうな！」

「っ！？／／／／そ、そんなの当たり前よ！　ほら早く行きなさいよ…」

まあ、俺なりに桂花を支えればいいか…今は目の前のことに集中しよう  
そんなことを思っていると近くの兵士俺の隣にいた春蘭に報告しに来た  
どうやら前方に大人数の集団がいるらしいそのことで華琳が召集をかけているみたいだ

「惣介。私は秋蘭と桂花を連れてくるお前は先に華琳様のところへ行っていてくれ」

「分かった」

俺は急いで春蘭にそう返事すると急いで華琳のところに向かった

華琳のところに戻った俺は華琳に言われ偵察部隊が帰ってくるまで待機していた

暫くして春蘭が秋蘭と桂花を連れて戻ってきた  
そして、そこにちよつどよく偵察部隊が帰ってきた

「華琳様遅くなって申し訳ありません」

「いいのよちよつど偵察部隊が帰ってきたところよ…それで報告を」

偵察部隊の報告によると前方の集団はだいたい数十人ほどらしい  
その報告を聞き桂花が少し考える素振りをした後俺と春蘭を指差し  
口を開いた

「もう一度偵察部隊を出すわ春蘭、惣介あなた達が指揮を執って」

「でも、桂花俺は指揮なんて執ったことないぞ」

「惣介には春蘭の抑え役をして欲しいのよ」

あゝなんとなく分かるな…目の前の集団に突っ込んでいく春蘭の姿が  
こうするのを抑える役ってことか

「頼んだわよ」

「何か自信ない」

「惣介！ 何をしているさっさと来い！」

俺の気持ちを知ってか知らずか春蘭は、俺の服を掴み俺を引っ張っていったそんな俺は、引っ張られながらどう春蘭の暴走を抑えようか考えていた

「まったく私1人でも十分だというのに……」

と俺に向かってなのか愚痴をこぼしてくる春蘭  
まあ、仕方ないと思うんだがな

「偵察も兼ねてるんだから猪みたいに突撃するなよ」

「言われなくとも分かっている！　そして私は猪ではなーーーーい！  
！」

本人はそう言うが春蘭が猪ということは周知の事実だしな  
そんな失礼なことを考えていると1人の兵士が来るのが見えた

「報告！　敵集団見えました！」

「そうか、ご苦労！」

しかしその集団を見てみると様子がおかしかった  
何かを囲むように一カ所に集まっていたのだ

「あれは戦っているのか？」

「惣介もそう見えるか私もだ」

おお！ 春蘭と意見が合うのは初めてだな  
と少し感動に浸りながらまた集団の方を見た

「重ねて報告！ 戦っているのは1人！ しかも小さな子供のように  
です！」

「なんだと！？」

俺は改めて集団の方を見る

…確かに子供が1人だけで戦ってるのが見えるだが…その子供詳しくは少女だがその少女が持っている武器鉄球？ が振られる度敵が空高く打ち上げられてるんだけど…  
人間ってあんなに吹っ飛ぶ物だったかな？

まあ、今はそれよりもこの状況を見た春蘭が大人しくしているわけがないよな

「って、もうあんなところにいるよ!？」

少し目を離しただけで…はあ

「俺は春蘭と共に敵の撃退をするお前等はこのことを華琳に報告してくれ」

近くにいた兵士達にそう言つなり俺は月蝉で一気に春蘭の所まで移動し、少女を囲んでいる奴等を斬り倒す

「春蘭大丈夫…夫だよな」

俺が見たときには既に半分くらいの敵を倒していた  
そんな春蘭に怖気づいたのか敵は逃げる準備をしていた

「た、退却！ 退却だっー！！」

敵の中の1人がそう叫ぶと敵はまるで脱兎の如く逃げていった  
そんな奴等を春蘭が放っておくはずもなく

「私から逃げられると思うかーっ！ 貴様等全員叩き斬ってやるー  
！！」

あーやっぱ追いかけてようとしてるよさすがに止めないとな

「止める春蘭」

「惣介！ 何故止めるー！！」

「俺達の任務は偵察だ敵を全滅させることじゃない」

「ふん！ 敵の戦力を削って何が悪い！」

敵ではなく今にも俺に斬りかかってきそうな勢いと威圧でそう返してくる春蘭

「悪くはないけどなあいつ等を追跡して本拠地を見つけ出した方がいいだろ？」

「むっ…その手があったな！ 誰かー！ 誰かおらんかー！」

今更！？ と思うがまあ、春蘭だしな仕方ないのかな？

「偵察なら先俺が何人か出したぞ」

「そうなのか惣介も中々やるではないか」

「そりゃどうも」

と軽く返事をし、その場にいたあの少女の方に向き直る

「大丈夫だった？」

と出来る限り優しい声でそう言う

まあ、見た目的には怪我はしてないようだけど

「ありがとうございます！ おかげで助かりました！」

そう言って礼儀正しく頭を下げる少女…でも近くで見ても一体どこにあんな鉄球を振り回せる力があるんだろうな？

やはりこの世界の女性は部分的に規格外なのか？

それ以前になんでこんな小さな子が一人で戦っていたんだ？

「君は何で一人で戦っていたんだ？」

そう少女に聞いてみる…しかしその時、間が良いのか悪いのか華琳達本隊がやってくるのが見えた

華琳達が到着して俺は報告に行かせたことを話した

でもこの少女華琳達が来てから何か様子がおかしいどうしたんだろうかと思いつながら話しを続けた

「惣介…戦闘があつた聞いたけれどその集団は何処に行ったの？」

「あいつ等なら春蘭に怖気づいて逃げたよ…それから一応偵察部隊に追跡させたから本拠地も分かるだろ」

俺がそう言うと華琳は満足そうに微笑んだ  
…少しドキツとしたが内緒だ

ゾクッ!?

「(惣介。後でお話しをしましょう)」

桂花にはばれていたようです…

「あ、あなたはっ…!？」

と先の少女が華琳を指を差しながら叫んだ

「あら？　この子は？」

という華琳の質問を無視し少女は…

「お姉さん…もしかして、国の軍隊？…っ！？」

「うむ、まあそうっ」「春蘭下がれ！」「うおっ！？」

春蘭が答えようとした瞬間少女は持っていた鉄球で攻撃してきた  
俺はそれを裏月でなんとか防いだ

くっ！　重い…あんなに小さい体なのにどうやってたらこんな重い攻  
撃が出来るんだよ

それに何でいきなり攻撃してきたんだ？

「貴様なにをする！」

俺は鉄球を裏月で打ち返し、少女に斬りかかろうとする  
春蘭を止めた

「春蘭相手は子供だぞ止めておけ」

「だが奴は私達に攻撃してきたのだぞ！」

「それは、分かっているいいいから話を聞くんだけ」

俺がそう言うのと一応は納得したのか春蘭は渋々大剣を下ろした  
俺も裏月をしまいがまた攻撃される可能性があるからいつでも動けるようにする

「国の軍隊なんか信用できるもんか！ ボク達を守ってもくれないくせに税金ばかり持って行くお前達なんか！」

そう言うと少女はまた鉄球を俺たちの方に投げる

後ろには華琳や桂花がいるだから避けることはできない…  
それならと俺は月蝉を使い一瞬で少女の間合いに入り投げる前に腕を掴んだ

「だから君は一人で戦っていたのか？」

「そつだよ！ ボクが村で一番強いからボクが村の皆守んなきゃいけないんだ！ 盗賊からも…お前達役人からも！」

少女はそう強く叫ぶと掴んである手を振りほどこうとして暴れる

っ！？ やっぱり凄い力だ振りほどこねる  
と思ったその時

「2人とも、そこまでよ！！」

という華琳の静止の音が響いた

「惣介もあなたも、下がちなさい！」

「は、はい！」

華琳の迫力に圧されたのか少女は軽々と振るっていた鉄球を地面に  
下ろした  
それを確認した華琳は俺と春蘭に目をやる

「惣介、春蘭この子の名は？」

華琳はそう言つと目の前の少女を指差し俺と春蘭に訊いてきた

「いや…その…」

「…知らない」

どうやら春蘭も知らないようだな…ここはあえて俺が代弁して言った

「き、許緒と言います…」

「こういう威圧感のある相手は初めてだったのか物凄く動揺する許緒

」  
「そう……」

そしてそんな許緒に対して華琳は……

「ごめんなさいね許緒」

そんな華琳の言葉に春蘭、桂花そしてあの秋蘭ですら口をパクパクさせ驚いている  
俺も驚いてはいるけどな

「名乗るのが遅れたわね。私は曹操、山向ここの街で陳留の刺史をしている者よ」

「山の向こうの…あ、それじゃあ!? ご、ごめんなさい! 山向この噂は聞いてます…向こうの刺史の人は立派で悪いことなんてしないし、税金も安くなつて賊の数も減ってるって…そんな人にボクは…ボクは!」

「大丈夫だろ間違いは誰にでもあるもんだし、な! 華琳」

「ええ、今の漢王朝が腐敗しているのは周知の事実、官と聞いて許緒が憤るのも当然の話しよ」

なるほど…俺はまだ他のところには詳しくないから分からないがどうやら外はかなり苦しいところみたいだな

「で、でも…」

そう口ごもる許緒…まあ、人違いで攻撃までしてしまったからな後ろめたい気持ちもあるんだろうな

「だからね許緒…あなたのその勇気と力を私に…この曹操に貸してはくれないかしら」

「ボクの…勇気と力を…ですか？」

「ええ、私はいずれこの大陸の王になるでもね今の私ではまだ駄目なの…許緒あなたの村を守りたいと思ったその勇気と力私に貸してくれるかしら？」

「曹操様が王になったら…村を守ってくれますか…盗賊達をやっけ

てくれますか？」

華琳に…：そうまるで神にでも縋るかのようには訊く許緒

「約束するわ。陳留だけでなくあなたの村でなくこの大陸の全てを皆が安心して暮らせるようにするために、私は王になるのこの大陸の王にね」

「また随分と大きくでたな華琳…でもそういうの嫌いじゃないぜ」

「当然よ。私は大陸の王になって、皆が安心して平和に暮らせる世の中にするの」

いいなそれ…華琳に着いてきて良かったよホント

とそんなことを思っていると俺が出していた偵察部隊の兵士が来るのが見えた

「報告します！ 敵本拠地発見！ すぐ近くにあります！」

「そう…分かったわ許緒」

「は、はい！」

何かされると思ったのだろうか少し緊張気味でそう返事をする許緒

「まず、あなたの村を脅かす盗賊団を殲滅するわその間だけでもい…力を貸してくれるかしら？」

「はい！ それならいくらでも！」

許緒がそう言うと華琳は満足げに微笑みそのまま俺の方を向いて言った

「ふふ、ありがとう…惣介、許緒はあなたの下につけるわ。分からないことは教えてあげてね」

「ああ、分かった」

華琳がそう言つと許緒は俺の方を向き、なにやら言はずらそつたして口を開いた

「あの…惣介さん？」

「さんはいらぬいよ好きに呼べばいい」

「えつと…じゃあ兄ちゃん」

「そう呼べばいいそれと…頑張ろつな許緒」

「…」

そう言っただけ俺は許緒の頭を撫でる…おお！ 中々撫でやすい頭だな  
それに許緒も嬉しそうにして満面の笑みってやつしてるし可愛いな

「では、総員行軍する。騎乗！」

華琳がそう言っただけ皆馬に乗った

「行くか許緒」

「うん！」

俺と許緒は馬がなかったため許緒は春蘭の馬に乗り俺は走った（走った  
方が速いから）

そして、報告にあった盗賊団の本拠地を目指した



第四話：小さな豪傑（後書き）

今回は少し長めに書けました

でも、感想が全然こない…orz

誰か…感想を！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2409t/>

---

真十恋姫無双～仁愛の忍び伝～

2011年5月17日02時27分発行